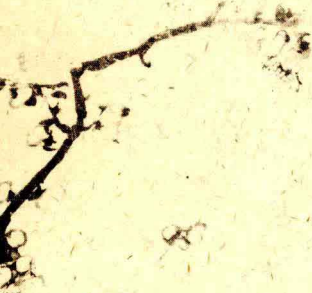




フランスの日本古典研究



小沢正夫訳・編



フランスの日本古典研究

小沢正夫訳・編

編者略歴

小沢 正夫（おざわ・まさお）

大正元年（1912）生まれ。本籍・茨城県。
昭和10年（1935）東京大学文学部卒業。文学博士。愛知県立大学名誉教授，中京大学教授。専攻・日本古典文学。

著書——『古今集の世界』『古代歌学の形成』以上 塙書房，『古今和歌集』（日本古典文学全集7）小学館，『作者別年代順 古今和歌集』明治書院，『平安の和歌と歌学』笠間書院。

共著——『平家物語』上，下（日本古典文学大系32，33）岩波書店，『袋草紙注釈』上，下 塙書房，『三代集の研究』明治書院，『古今和歌集』（完訳日本の古典9）小学館。

共編——『和漢比較文学叢書』8巻 汲古書院刊行中。

フランスの日本古典研究 | 昭和60年9月30日 初版第1刷発行

© 1985 編者 小沢 正夫

発行者 救仁郷 建

発行所 株式会社 ペリかん社

〒113 東京都文京区本郷2-24-4

振替・東京 0-48881 TEL 03(814)8515

印刷・ミクニ印刷 製本・石津製本所

定価 2800円 | 書籍コード 0091-318372-7612

はしがき

本書にはフランスの日本古典学者の手に成る七編の研究論文の翻訳と、日本を訪れたフランス人教授を交えて、日仏の中世文学の比較をテーマとした討論会の速記録とを収め、さらにフランスにおける日本古典研究の由来を略述した解説を添えた。現今のフランス人の日本研究は各時代・各方面にわたっているが、「古典」とここで呼ぶのは、編者である私の研究分野に比較的近いものに限られている。そんなつもりで選択した論文ではあるが、それでもいちおうのまとまりはあると思う。

フランス人の研究法——これも当然種々様々であるが、科学的・実証的なのがあるがその特色の一つであるように思われ、その点ではわれわれ日本人の国文学研究の傾向と似た所もある。しかし一方では、日本古典の研究に際してもその背景である当時の日本社会のあり方、日本文化全体との関連がいつも考慮されているので、その眼界の広さにはわれわれの学ぶべきものがあるだろう。もっとも論文の範囲を狭義の文学よりも少し広げたので、適切には歴史学・美術史学の論文といふべきものも混っているが、詳しくは各論文末の執筆者紹介をご覧ください。

執筆者中のお二人はすでに故人となられたが、お二人の研究歴は戦前にまで遡り、現代の研究の先駆的な業績を上げておられる。本書に収めた二編はどちらも戦後のものであり、現在フランスで研究

の第一線に立っていらっしやる他のかたがたの論文と同じ一冊にまとめても、古さを感じさせるものではないと信じる。

このごろの日本の学界では、新出の資料も比較的早く影印・復刻などされて、数多い研究者からただちに活用されている状況である。けれどもわれわれの周囲を見ると、資料や参考書が多すぎるために思索がかえっておろそかになり、文学が芸術であることを最初から忘れているような資料処理がなされている場合もみられる。われわれの遠方の友人が資料的に多少不利なことはないが、その論文は深い思索の精華であり、フランス人らしい芸術的センスが随所にひらめいたものであって、やはり教えられる点は少なくないと思う。

なお、本書所収の論文中のいくつかは日本古典のフランス語訳の序論として書かれたものである（詳細は執筆者紹介とともに記した）。たとえそういう事情で書かれなかったとしても、フランス人を主たる読者としてフランス語で発表される以上は、序説的・解説的な要素を加味するほうが親切というものであろう。そればかりでなく、現代の日本の古典研究者は各人の専門が細分化し、その研究分野から少し離れた問題には素人と同様であることが多いのである。だからそういった日本の国文学者にとっても、あるいはもっと広い範囲の、現代ヨーロッパでの日本研究に関心をもたれる多数の日本人読者にとっても、ここに訳出された諸論文が極端に専門的でないほうが、かえって好都合であるとも思われる。

その次に載せた討論会の成り立ちは、記録の冒頭の司会者のことばによって明らかである。前に掲

げたフランス人の研究論文の数編は日本の軍記物語と関係あるものだから、それと関連の深い討論会記録をここに収め、彼我両国の中世文学の比較研究をおし進める一つの契機にしたいと、われわれは願っている。

このような内容の書物をまとめるために、フランス文の翻訳には特に大勢のかたがたのご指導とご協力をいただいた。そういうかたのご援助をすべて「共訳」と呼んで、お名前を論文の終りに記させていただいたが、共訳の実態は種々様々である。また、前記の討論はその時の録音テープをもとにして、それぞれの発言者が発言したところをご自分で原稿にして下さったのである。

本書が編まれるまでに大勢のかたから賜わったご援助には測り知れぬものがあるが、その中でジャン・ショレー氏からのご恩だけはまったく別物だから、ここに記させていたどころ。同氏は一九六六年に愛知県立大学外国語学部の客員助教として来任せられ、八一年秋にリヨン第三大学日本語科助教授に任じられて帰国せられた。その間十数年にわたり、同氏と私とは日本語とフランス語を勉強するため、お互いに師となり門人となるレッスンを続けた。私のほうが教えてもらうために取り上げたテキストは、フランス文学と日本古典文学とのフランス人による研究論文が主なものである。こうやって長い間に、ショレーさんに読んでもらったものの幾つかが、今やっと思の目を見ようとしているのである。

本書と性格の似たものには、国文学の研究誌で世界各国の人々の日本文学研究論文の紹介、日本人と外国人とを混えた座談会記事などを載せた「国文学解釈と鑑賞」(一九六五年一月、一九七〇年五月)、

「文学・語学」(一九八〇年五月)、「文学」(一九八二年二月)の特集号がある。本書がそれらと比べると違ふのは、かなり長い論文や、古いものでも内容が特に充実したものなども収録した点であろう。

なお、相当地に専門的といえる論文の翻訳と掲載のご許可を初めてお願いしたところ、フランスのどのかたからもただちにご承諾の返事があり、その後も何回か、私の訳文その他についての質問にご回答下さった。また出版については、東京女子大学の秋山虔教授のなみなみならぬご配慮にあずかり、ペリかん社の橋本愛樹氏は原稿未完成の段階から、たえず相談に応じて下さった。

分量からみれば小さな企てにすぎないけれど、これほど大勢のかたのご援助・ご協力を賜わったことを思うにつけて、私は本書が一人でも多くの日本人に読まれることを心から願うばかりである。

一九八五年早春

小沢 正夫

フランスの日本古典研究 ● 目次

はしがき

1 源氏物語の本質

シャルル・アグノエル

9

紫式部の物語観／源氏物語の登場人物／物語中の女性の地位／源氏物語の手法／読者が求めた理想の世界／「もののあはれ」について／宿世と解脱

2 和歌の浮島は実在か虚構か

ベルナール・フランク

41

古歌に現われた浮島／「島」の語義と浮島の生成／和歌のテーマとしての浮島

付記

3 宮廷文人大江匡衡

フランシース・エライュー

65

匡衡の家系／匡衡の生涯／学者としての匡衡／政治家としての匡衡

4 今昔物語集とその世界

ベルナール・フランク

93

はじめに

一 時代の鏡今昔物語集

仏教の繁栄／悪と力の世界／庶民の憧れ

二 著者は誰か

三 今昔物語集の評価

むすび

5 悪左府頼長

ジュオン・デ・ロングレ

157

死後の頼長／悪左府の呼称／悪左府の墓／頼長の歩んだ道／告別のことば

6 横笛草紙と平家物語

ジャクリーヌ・ピジョー

185

発端 滝口・横笛の恋愛／父親の反対と滝口の出家／横笛の滝口探索／往生院の場面／横笛の死／結末 高野山に入る滝口／むすび／挿絵に現われた横笛草紙の興味の中心移動

7 中宮寺の半跏思惟像

フランソワ・ベルチエ

207

はじめに／彫像技術から見た中宮寺像／様式と制作年代

討論会

日仏叙事文学・物語文学の比較研究

開催のことは／日仏中世叙事詩の概観／武勲詩、騎士道
物語流行の時代・地域と作者／叙事文学発生の歴史的背景
／平家物語は武勲詩的か騎士道物語的か／日仏の叙事
文学の相違点／叙事詩と歴史／叙事詩と女性

フランスにおける日本古典研究

——開拓者たちが残したもの——

小沢 正夫

267

共訳者・討論会出席者紹介

223

Ⅰ 源氏物語の本質

シヤルル・アグノエル

『源氏物語』はその前後に日本で書かれた「物語」の中で、異議なく最上位に位するものであり、簡素ではあるが明らかに技巧をこらした入念な文体、ゆたかで変化に富んだ内容、三十人にもものぼる主要人物とその間に介在する副次的人物とを含めたおびただしい登場人物数によって、日本の古代文学の不朽の大作の一つ、かつその最長のものとなっている。しかも、この物語の重要性はこれにとどまらない。まず、この物語のテキストは近代の活版本だと千五、六百ページになるが、それは洋の東西を問わず、十三世紀以前に現われた小説風物語中の最長編である。さらに、この物語はそのおもしろさと質の高さにおいて、古代または中世前期に東洋、西洋で生まれた同種類のどんな作品にも劣らないばかりでなく、十一世紀の最初の十年間にはすでに成立していたにもかかわらず、十三世紀の初めから十七世紀の終りにかけて、西洋や中国を含めた全世界で粹人たちを楽しませたさまざまな長編物語と比べても劣ることはない。そして最後に、たとえわれわれが文学形態・地域性・時代性などを考慮することなくこれを論じたとしても、この作品のもつ深い人間性と、その美しい粉飾の下にある

新鮮味と魅力は今なお失われてはいない。こうしてこの物語は、人類史上最高に美しい文学作品の一つに数えられるのである。要するに、『源氏物語』の重要性は、これを読めばどんな文明社会に生まれた人であっても、高い趣味の持主ならばかならず感動させられる傑作だという点にある。(中略)

紫式部の物語観

『源氏物語』は、どんな執筆過程を経て、また、どんな制作意図をもって書かれたのか？　こう問われた時に、われわれはふつう、この作品は、作者があらかじめ綿密な構想を定めた上で書いたのではなかったと答えるのである。というのは、紫式部はむしろ大まかで融通のきく荒筋を立てて執筆を進めたように思われるからである。その荒筋の中に、彼女は着想のおもむくままに、または、いくらかの場面を考えた上で巧妙に脚色されたさまざまな挿話をたがいに連続させ、さらに、いろいろな考察をもその間に織り込んでいった。こうすることが、読者の心をひくのに適していると考えられたのである。後に述べるように、紫式部にとっての一大関心事は、まさに読者の心をひき読者を喜ばせることなのであった。彼女がそれに成功したことは、『更級日記』の一〇二二年の記事中の一節をはじめ、当時のいくつかの記録がすでにわれわれに教えるところである。作者自身の言では、『源氏物語』から抜き出した次の一節が相当明瞭に、彼女が用いざるをえなかった技巧や、文学上のねらいを達成するために頼った効果を示唆している。

長雨が例年よりもひどく続いて、空も心も晴れるすべなく所在ないので、六条院では御方々が絵や物語などの慰みごとで、夜を明かし日を暮らしていらっしやる。明石の御方は、そのようなことも一趣向あるように

お仕立てになつて、姫君のもとへおさしあげになる。西の対の玉鬘の君は、物語などはもつと珍しく思われなさるすじのことなので、明けても暮れてもせつせと書いたり読んだりしていらつしやる。この道に堪能の若い女房が大勢いる。さまざまに、めつたにありそうもない人の身の上などが、本当なのか嘘なのかわからなけれど、たくさん語られていゝななにも、自分のような境涯の人はなかつた、と思つてごらんになつてゐる。(中略) 殿もあちらにもこちらにもこうした物などが散らばつていて、たえずお目につくので、「ああ、うつとうしいことだ。女というものは、めんどうくさがりもしないで、人にだまされるように生まれついでるものですね。たくさんある物語のなかに本当のことはごく少ないでしょうが、一方ではそれがよくわかつていながら、このような出まかせの話に気を奪われ、真にうけたりなさつて、暑苦しい五月雨さみだれどきに、髪の毛の乱れるのもかまわず、書き写していらつしやるのですね」と言つて、お笑いになるもの、また、「このような古物語を見るのでなくては、なるほど、どうにもまぎらしようもない所在なさを慰められるでしょうか？ それにしても、こうした数々の作りごとのなかに、なるほどそんなこともあるだろうとしみじみとした人情味をみせて、もつともらしく書きつづけてあるのは、どうせたわいもないことと承知はしながら、むなしく興味をそそれれ、可憐な姫君がもの思いに沈んでゐる有様を見ると、幾分か心がひかれるものですよ。また、まったくありそうもないことだなどと思つて読んでいくにつれて、大げさに誇張して書いてあるのが目をみはる思いで、落ち着いてもう一度聞く段になつては、こんなことがあるものかと腹立たしくなりますが、それでもまた、思いがけず、ひよつと感心させられるところが、明らかに語られてゐることもあるでしょう。このごろ幼い人〔すなわち明石の姫君〕が女房などにとときどき読ませているのを立ち聞きすると、世間には話の上手な者があるものだ、こんな物語も、さぞかし巧みに嘘偽りをいづも言いなれた口から言ひ出すわけなのだろう、と感じますが、「あなたによれば」そうとも限らないのでしょうかしら」とおつしやる、〔玉鬘の〕姫君は、「仰せのとおり〔あなたさまのように〕いつも作り言ばかりしてゐる人が、さまざまにそうや

って推量なざるのございませうか？ 私にはどうみてもまったく本当の出来事のように存ぜられるのでございますけれど」と言つて、硯を押しやられるので、「源氏は」「これはいかにも無風流に物語をけなしてしまいましたね。物語というものは、神代以来のこの世にあることを書きのこしたものといたします。日本紀〔官撰の年代記〕などは、ほんの片はし「を伝える」にすぎないものです。これらの物語にこそ、かえつて公けの道理にもかない、委細を尽くした事柄が書かれてあるのでしやうね」と言つてお笑いになる。

「そしてさらに」「だれそれの身の上といつて、ありのままに書きしるすことにはないにしても、よいことであれ悪いことであれ、世間に生きている人の有様で、見るにも見飽きることなく、聞くにも聞流しにできないことや、後世にも言い伝えさせたいような事柄の一つ一つを、心につつまきれないで、言ひおいたのが始まりなのです。人をよいようにいふ場合には、そのすぐれた所だけを選び出し、人の関心に応じようとする場合には、また悪しき有様でめつたにありえないことをたくさん書きつらねる、そのよいこと悪いこと、いづれの方面に關したことも、みなこの世のほかのことではないのですよ。外国の宮廷の物語まで考えてみても、国が違ふから、書き方は変わつてゐるし、日本の物語も同じ国のことなのだから、昔のそれが今のと違つてゐて当然でしょう。その内容に、深い「動機にもとづく話」と「浅い「もの」と」の相違はあるでしょうが、一途に嘘偽り言といつてしまふのも実情に合わないのです。仏がまことにりつぱなお心からお説きになつてゐるご法文にも、方便といふことがあつて、悟りのないものはあちこち矛盾するといふ疑念をきつと持つにちがひありません。方便の説は方等經〔大乘經〕の中に多いけれども、詮じつめてゆけば、結局は同一の趣旨によつてゐるので、菩提と煩惱との差が、物語中の人物の善と悪との差ぐらいに違つてゐるわけです。善意に解すれば、すべてどんなことが書いてあつても無益なことにはならないでしょう」と、物語をこ

とさら有益で大事なものとしてご説明になられた。(中略)

紫の上も、明石の姫君のご注文にかこつけて、物語を手放しがたいものと思つていらつしやる。くまの物

語が絵に描いてあるのを、「ほんとに上手にできている絵です」とおっしゃって、ごらんになる。絵に小さな女君が無心に昼寝をしていらっしやるところを、昔のご自分の有様をお思い出しになってごらんになれる。殿は、「このような子供同士でさえも、なんとまあ世なれていることですね。(中略)「わたしの娘の明石の」姫君の御前で、この色恋の物語などを読んでお聞かせにならぬがよろしい。秘めごとを心に抱いている何かの娘などは、おもしろいと思わぬまでも、このようなことが世間にはあるものだったかと、そのことをふつうのこととお考えになってはたいへんなことです」とおっしゃる。(中略)上は、「思慮のあさはかな人まねなどは、はたで見てもはらはらします。さりとして、『宇津保物語』の藤原の君の娘は、ほんとに分別に富んでいてしっかりした人で、まぢがいはないようですけれども、そっけない物の言いぶりや物腰に女らしいところがないようで、やはり同様によくないでしょう」とおっしゃるので、殿は、「実際の人間もそのとおりでしょうね。人は一人前に、その主義がそれぞれがっていて、程よくふるまうことができないのでしょう。教養のなくはない親がよく注意して育てあげた娘が、無邪気で子供らしいということができないものとりえとして、それ以外には足りないところが多いのは、いったいどんなしつけ方でだいに育ててきたのかと、親のやりかたまで思いやられるのは、まったく気の毒なものです。いかにも、そうは言っても、娘を見てさすがにその人の身分にふさわしい感じだなと思われるのは、親としての育てがいがあり、面目の立つことです。「まわりの者が」口をきわめてきまりわるいくらいにほめちぎっておいたのに、当人のしでかす行ないや言い出す言葉を見たり聞いたりして、なるほど「評判どおりだ」と思われるところのないのは、まったく見劣りのするものです。総じてつまらぬ人には、どうしても、娘をほめてもらいたくないのです」などと、ひたすらにこの姫君が非難をお受けにならぬようにと、何かにつけてお心をつかわれ、おっしゃられる。意地悪な継母まははの昔物語も多いが、それは継母とはそういうものだ、(紫の上が養母の役目を務めていらっしやる明石の姫君に)教えることになり、おもしろくないとお思いになるので、「姫君にお

見せする物語は」嚴重に選り分けては、清書させたり、絵などにもお描かせになられたのである。

上記の文章で誰の目にも興味深いのは、『源氏物語』を始めとする一般の「物語」が、「作り物」という範囲内では、読者とくに女性読者の心情と想像に直接語りかけたものであることを、十分に示していることである。来る日も来る日も無為の生活によって「つれづれ」に悩まされていた宮廷貴族、とくに貴夫人、姫君にとつて、物語を読むことが「すさび」となりえたのであった。換言すれば、作者から心のかてとして与えられた、多少とも目先が変わり、手がこんだ「そらごと」「いつわり」「ふし」が読者の心をとらえたのは、行為や事件そのものがいかに「めづらかな」ものであつても、物語の全体が本当にあつたこと、あるいはたしかにありそうなことだという幻想に、読者がどの程度引き込まれるかによるのであつた。要するに、この文学ジャンルが流行したのは、読者または聴衆が、物語を魅力ある「をかしき」ものと思ひ、彼らの単調な日常生活と好対照をなすものであるとみるからこそ、そのからくり喜んで乗せられ、進んで遊びに加わり、そして、作者を信じることに同意したからなのであつた。

なおまた、前掲の『源氏物語』の一節によつて、「物語」とは、漢字で書かれた儒仏の実践道德の經典には直接に近づきえなかつた一部の宮廷人のために書かれた、身分高き人々の行為の「かがみ」ともいふべき役割を果たしたことが分かる。実際、このような小説風の物語は、ちょうど、無知ゆえに仏の妙法を理解できないでいるこの世の衆生に悟りを開かせる方法、いわゆる「方便」が果たす